

序 章 アーカイブズ資源研究の動向と課題	大友 一雄
----------------------	-------

はじめに

第一節 アーカイブズ資源研究とアーカイブズ管理

第二節 真田家文書群とアーカイブズ活動

第三節 本書の構成と各論文の概要

第一編 藩庁の組織構造と記録管理

第1章 松代藩・国元における行政組織とその場	原田 和彦
------------------------	-------

はじめに

第一節 松代城内の役所

第二節 松代城下の役所と組織

第三節 拝領屋敷（宅役所）を役所とした組織

第四節 文書の箱と普請奉行

おわりに

第2章 家老職における執務記録の作成と保存	54
-----------------------	----

はじめに

第一節 〈家老日記〉から見た御用部屋の執務記録

第二節 御用部屋の執務記録と「御日記御土蔵」

おわりに

第3章 真田家文書からみる松代藩組織構造と「物書」役	82
----------------------------	----

はじめに

第一節 諸史料からみる藩政組織

第二節 「物書」職に関する概要

おわりに

第二編 藩庁と藩庁外の記録管理システム

第4章 江戸における大名課役をめぐる引継文書と藩政文書	105
-----------------------------	-----

——松代藩の所々火消勤役を事例に——

はじめに

第一節 江戸在府中の大名課役と大手方火之番

第二節 「江戸家老日記」と「大手方日記」の関係

第三節 大手方火之番の職務引継と文書

おわりに

第5章 糸会所の記録作成・授受・管理と機能……………西村慎太郎

——記録管理システムと専売制——

はじめに

第一節 松代藩養蚕業・製糸業の概要と糸会所の設置

第二節 糸会所の組織について

第三節 糸会所を通じた糸に関わる文書の作成・授受

第四節 糸会所による糸に関わる人びとの管理

おわりに

131

第6章 松代城下町町人地の行政情報蓄積様式にみる家と組織…渡辺 浩一

はじめに

第一節 町年寄の家における情報蓄積様式の変化

第二節 情報蓄積様式における町年寄と町奉行

おわりに

158

第7章 松代藩代官文書の管理と伝来について……………種村 威史 180

はじめに

第一節 松代藩代官の職制・執務空間と文書管理

第二節 代官文書の引継ぎ・授受・作成とその特質

第三節 明治以降の代官文書の伝来過程

おわりに

第8章 官僚制機構の末端としての村……………福澤 徹三 202

——藩地域研究とアーカイブズ研究との接点——

はじめに

第一節 松代藩の在地支配機構と北高田村北条組の村役人

第二節 書留帳の内容と拝借金延期願

第三節 天保期の書留帳から見える「機関委任事務」

おわりに

第三編 大名家伝来文書群と記録管理

第9章 幕府老中職文書群に関する基礎的研究……………大友 一雄 225

——松代藩公用方役人と文書システム——

はじめに

第一節 幕府老中職と公用方役人

第二節 江戸藩邸の公用方役人と老中の登城

第三節 老中江戸藩邸と江戸殿中との連携と文書記録

おわりに

第10章 松代藩御納戸役の職掌と記録管理……………降幡 浩樹

257

はじめに

第一節 御納戸役の職掌

第二節 御納戸役と道具管理

おわりに

第11章 藩主生母の格式をめぐる意思決定の史料空間……………福田 千鶴

280

——九代藩主真田幸教生母心戒の事例を中心に——

はじめに

第一節 近世後期の真田家

第二節 御妾取扱法式・見合書類（へ印袋）の作成

第三節 心戒に関する評議書留

おわりに

第四編 伝来と管理

第12章 真田家印章の使用と伝来……………	山中さゆり
-----------------------	-------

はじめに

第一節 印章の使用

第二節 印章の管理と伝来

おわりに

第13章 真田宝物館所蔵真田家文書の管理と容器の特質……………	工藤 航平
---------------------------------	-------

——目録編成に向けた現状調査報告——

はじめに

第一節 真田家文書群の来歴と分散管理

第二節 真田宝物館所蔵真田家文書の史料整理の歴史

第三節 保管容器と目録編成

おわりに

357

311

あとがき

執筆者紹介

序 章 アーカイブズ資源研究の動向と課題

大友 一雄

はじめに

アーカイブズへの関心は、分野・時代などを超えて広がりつつある。学術文化の情報資源として、また、個人や団体の権利や平等性に関わる基本情報として、その保存と公開が強く意識されている。

保存公開などの実現にはアーカイブズ・システムの開発・整備と同時に、アーカイブズそのものの（アーカイブズ資源）に関する研究の重要性が指摘されてきた。アーカイブズ学そのものの体系にも関わるが、たとえば、大藤修「史料と記録史料学」⁽¹⁾は、アーカイブズ学（記録史料学）が史料学と史料管理学で構成されること、史料管理学が対象とする文書群全体の構造的分析、それに基づく目録記述・情報資源化、保存管理、公開活動などの実務は、史料学によるアーカイブズの資源理解を前提に行うべきことを主張する。その後、安藤正人による史料認識論もそのような理解を整理・発展させたものといえる。⁽²⁾

また、こうしたアーカイブズ学の組み立ては、アーカイブズ学教育のプログラム構成においても取り入れられてきた。たとえば、国文学研究資料館が主催する史料管理学研修会（アーカイブズ・カレッジ）では、全体を

アーカイブズ学総論、アーカイブズ資源研究、アーカイブズ管理研究（編成記述・法制・保存）という三つの柱のもとに構成している⁽³⁾。また、国立公文書館の「公文書館専門職員養成課程」や、日本アーカイブズ学会の登録アーキビスト認定における「アーカイブズ学に関する専門科目の履修要件」などにおいても、講義名称に違いはあるもののアーカイブズ資源論、公文書論、史料論などとして、プログラムのなかに位置づけられている。

アーカイブズというモノを対象とする活動において、対象物に対する高い見識が求められることは当然であり、その充実化は常に求められているというべきである。

本書において、アーカイブズ資源研究を課題としたのは、以上のような理由からである。また、本書では、大名真田家文書を主な対象としながらも、密接に関わる代官文書・御用達文書・町年寄文書・村役人文書など出所を異にする文書群も分析対象とした。アーカイブズ学ではひとつの文書群を単位として調査・分析を行うことを基本とするが、大規模な組織となる近世大名の諸機能は、関連する集団の活動によって担保されており、伝存する文書群を理解するには相互的な検討が欠かせない。また、こうした検討を通じて当時の文書システム、記録管理の実態を明らかにできると考えたためでもある。さらに、特定の近世大名を取り上げることにより、アーカイブズ資源研究の深化と広がり期待した。以上の理由から、書名を『近世大名のアーカイブズ資源研究——松代藩・真田家をめぐって——』とした。

既刊の『幕藩政アーカイブズの総合的研究』（思文閣出版、二〇一五年）において全国の大名文書群の文書管理の実態やその史的展開について議論を試みたが、本研究は、そこでの成果も踏まえながらも、アーカイブズ資源研究に軸足をおき、真田家という特定の大名の文書群を核に、松代藩・真田家と密接に関わる文書群を対象として、記録管理とそのシステムに関する議論の深化を目的とした。レコード・マネージメントに関する研究などを強く意識して、空間、伝来、印章などの分析とその基本的情報の公開にも留意した。特定の大名を対象とした

アーカイブズ資源研究ということでは、はじめての実践研究となる。

第一節 アーカイブズ資源研究とアーカイブズ管理

アーカイブズ資源研究について簡単に確認したい。モノとしてのアーカイブズのコントロールでは、モノそのもののあり方や所蔵者・施設・調査者などをはじめとする諸条件によって、その具体的な方法が大きく異なることが考えられる。アーカイブズ管理の取り組みは、アーカイブズ資源についての十分な理解が前提となるべきである。両者の相互的な取り組みのなかでアーカイブズそのものの理解もまた深まることになる。こうした実際の活動を念頭に、アーカイブズ資源研究は、記録管理に関わる研究、伝来研究、アーカイブズ構造分析などが具体的な柱として考えられる⁽⁵⁾。

もちろん、これらはアーカイブズ活動に関わって検討を要する課題であり、手続的には、三つ目のアーカイブズ構造分析に収斂され、目録記述に反映されることが期待される。ただし、現実には三つの問題は関連的に、また複合的に結びつけられて議論されることが少なくない⁽⁶⁾。

アーカイブズ資源研究を以上のように捉えた場合、これらについて言及した成果は少なくない。たとえば、三つ目のアーカイブズ構造分析に関しては理論に関する研究⁽⁷⁾、そして、構造分析の実践研究と基礎研究がある。二つ目の伝来研究は、多くは他の問題と複合的に取り上げられることが多いのであるが、本書の工藤航平論文はこれを正面から取り上げる。また、一つ目の記録管理に関する研究では、意思決定・意思伝達・集合記憶などに関わる文書利用を、各組織や各文書群単位に言及するものとなる。なお、本書では、各研究者の意向を尊重して、文書・記録・アーカイブズなどの用語利用はそのままとしたが、「文書管理」「記録管理」などという場合、この管理は保管の意にとどまらず、作成から保存・廃棄に至る全体のコントロールを意味して使用される。レコー

ド・マネジメントも射程に入れた視角を有している。そして、それらの作成・授受・保管・利活用に関するすべての流れ（以前は「ライフ・サイクル」と捉えていた視角）、そこに介在する組織・役職、管理方法、作成・授受から利活用までに利用される道具・容器・環境などを含めて、「記録管理」の対象であり、そこに構築されたシステムが記録管理システムとなる。したがって、料紙利用、文書様式、書体、伝達方法、印章、保管など多くの問題が記録管理研究での課題となる。

アーカイブズ学ではとくに具体的な文書群を単位とするアーカイブズ管理に関わり、以上のような分析的な取り組みが少なからず必要となるわけである。⁽⁹⁾

第二節 真田家文書群とアーカイブズ活動

本書が注目する真田家文書は、既述の通り信濃国松代を城地とした大名真田家に伝えられた文書群であり、いわゆる「家」のもとで管理されてきた文書群と、藩庁などに蓄積した文書群からなり、現在、国文学研究資料館（五万五〇〇〇点余）、真田宝物館（一万七〇〇〇点余）に収蔵される。

近年、本文書群を活用した大名研究、藩政研究、地域研究、江戸研究、幕府勤役・役職研究、地震研究、財政・経済史研究、学芸文化研究など実にさまざまな研究が進展しつつある。⁽¹⁰⁾これは近世大名文書群がとくに当時の政治社会システムに関わって、また、地域社会や学芸なども含めてもとても総合的な性格を有する文書群であることと関連する。大名文書はその基本的な性格において大名研究・藩政研究においてのみ有効なものではないことを確認したい。

さて、それでは、収蔵機関である国文学研究資料館（文部省史料館、国立史料館）は、この真田家文書群に関わってどのようなアーカイブズ活動を行ってきたのであろうか、次に簡単に紹介し、そのうえでアーカイブズ活

動との関わりで本書の刊行を位置づけたい。

真田家文書に関するアーカイブズ活動について、その主要なものを示すならば、①受け入れのための事前調査、受け入れ、配架、仮目録の作成、仮公開などの段階を経て、②アーカイブズの構造を意識した文書目録の作成・刊行（合計一二冊、二〇一一年完成）、③保存装備、④全文書の公開を実現した。また、⑤インターネットを利用した文書目録PDFの公開、文書目録データベースの開発・公開を実現し、現在、重要文書などの画像公開を進めつつある。以上の活動を基本的なアーカイブズ活動と捉えており、すべての文書群は同様の段階を経ることになる。

また、これらの基本活動とは別に、⑥文書の利用環境整備に関わり、家臣団の家譜を集成した『真田家家中明細書』⁽¹⁾、真田家国家老日記の日記線出を収録した『松代藩庁と記録』⁽²⁾などを刊行した。とくに『真田家家中明細書』は、人物確認などにおいて有用な情報提供になるとの判断から作成したものである。

さらに、こうした利用ツールの整備などとも密接に関連するが、⑦真田家文書の関連文書の調査を実施した。とくに真田宝物館が所蔵する真田家文書については、同館員と合同で目録作成作業を続けるなど、アーカイブズ活動における連携を深めてきた。また、家老文書や代官文書などの所在確認・写真撮影などを進めつつある。さらに館内活動との関連では、真田家文書目録の完成後、松代藩御用達商人などを勤めた八田家の文書目録作成を重点的に進め、二〇一六年段階で八冊の目録を刊行した（継続中）。

これまでの真田家文書に関わる主要なアーカイブズ活動は、おおむね以上の通りであるが、今回、新たに本書を付け加えることになる。これは、利用者による様々な研究成果の公表や、館員によるアーカイブズ活動を通じた疑問や発見などをもとに、共同での調査を進め、その成果を共有することを目的とした。とくにアーカイブズ理解のうえで重要と考えられた組織構造や各部署の具体的な機能を記録管理システムとの関連で把握することに

留意した。この点は、個々の文書の理解と文書群全体の中での位置付けの問題に密接に関連する⁽¹³⁾。したがって、本書は、アーカイブズの全体的な構造理解に関わる基礎研究ということもできる⁽¹⁴⁾。大規模な組織では、組織構造も複雑なものとなり、各部署の組織構造やその機能を目録刊行段階までに十分に理解しきれないことも関連している。

また、国文学研究資料館・真田宝物館で合同の調査を進めるなかで、伝来経緯や保管の実態などについて具体的な研究が欠かせないと判断された。さらに収蔵公開機関に期待されるアーカイブズ資源に関する情報とは何かといった問題について、具体的なレベルで取り組むことを試みたものである。

本書の刊行は、利用者によるさまざまな研究成果やアーカイブズ活動のなかでの発見や課題を踏まえて、共同研究を組織し議論を深め、その取り組みの一端を広く共有することを目的としたが、具体的なアーカイブズ活動との関わりで捉えるならば、実践のための基礎研究の蓄積ということになる。また、本書は同時に大名に関わるアーカイブズ資源研究として、とくに記録管理研究に関わる学術研究としてその意義を問うものである。

第三節 本書の構成と各論文の概要

本書の刊行にあたっては、大名に関わるアーカイブズ資源研究で重要と考えられるテーマを仮説的に設定し、共同研究を通じて検討を進めてきた。テーマは、組織構造の特徴、空間的な異同、文書の伝来などを念頭に構成したものであり、具体的な取り組みを反映させて本書は以下の四編構成とした。

第一編「藩庁の組織構造と記録管理」、第二編「藩庁と藩庁外の記録管理システム」、第三編「大名家伝来文書群と記録管理」、第四編「伝来と管理」である。

第一編「藩庁の組織構造と記録管理」は、松代藩庁における文書の作成・授受・保管の様相を検討し、藩庁組

織内部の記録管理システムの特質を明らかにした成果である。

第1章の原田和彦「松代藩・国元における行政組織とその場」は、国元における行政活動の「場」（＝役所）の所在とそこで作成された文書の存在、そしてその保管について検討する。本丸御殿・花の丸御殿（近世半ば以降に御殿機能を有した建物）・二の丸・三の丸といった城内をはじめ、評定所など城下の役所・拝領屋敷の役割や記録管理システムについて、各役所の注文に応じて普請奉行が作製した文書の保存容器の存在なども含めて論じる。大名真田の藩庁組織と記録管理の全体像を「場」と「保存容器」などに着眼して提示する大きな試みとなっている。

第2章の太田尚宏「家老職における執務記録の作成と保存」は、真田家文書を理解する上で重要となる家老御用部屋の記録がほとんど現存しない状況に鑑み、各家老が作成した「家老日記」などを用いて、御用部屋で作成・保管された基本的執務記録を明らかにするとともに、それらの保存について「御日記御土蔵」などの利用も含めて検討する。土蔵に収納された記録名なども示しており、当時の記録管理の実態が活用なども含めて復元される。

第3章の宮澤崇士「真田家文書からみる松代藩組織構造と「物書」役」は、従来利用されてきた藩の職制表の再考を提起し、近世後期の組織・役職に関する史料を紹介した上で、様々な役職に付属する「物書」の存在を明らかにする。松代藩の「物書」については従来注目されてこなかったが、様々な史料から博搜して役割の復元を行い、各部局における記録作成を解明するうえでの新たな視点を提供する。

第二編「藩庁と藩庁外の記録管理システム」は、松代藩庁と関連する組織（文書群）に注目して、そこでの文書の作成・授受・保管の様相を検討し、藩庁を含めた記録管理システムの特徴を明らかにする。いうまでもなく、これらの研究は当時の政治システム、またはその質を問う研究となっている。

第4章の岩淵令治「江戸における大名課役をめぐる引継文書と藩政文書——松代藩の所々火消勤役を事例に——」は、江戸家老による大手方日記の特質を論じた上で、職務の引き継ぎに関わる文書の様相を明らかにする。大名の役負担による大手方火之番は、幕府からの任命、役の遂行に関わる情報伝達、そして情報の蓄積が不可欠であった。幕府や他藩との関わりが求められる江戸における記録管理システムの様相が明示されており、藩外の記録管理システムとも大きく関わる成果である。

第5章の西村慎太郎「糸会所の記録作成・授受・管理と機能——記録管理システムと専売制——」は、松代藩の専売制を担った城下町の糸会所（天保四年からは産物会所）と町奉行・郡奉行、その配下役人との記録管理システムを明らかにする。本研究は専売制の問題を記録管理システムから検討した成果ということもできる。

第6章の渡辺浩一「松代城下町町人地の行政情報蓄積様式にみる家と組織」は、城下町の記録（町年寄日記）を分析した上で、町奉行日記との比較を行い、個人的取り組みによる記録と組織的な取り組みによる記録など、当該期の記録蓄積の特徴を明らかにした。

第7章の種村威史「松代藩代官文書の管理と伝来について」は、代官を務めた野本家に伝来した文書を素材として、代官文書群の伝来や保存管理について、職制や執務空間との関係を踏まえて検討し、代官文書が宅役所で管理され、現代に至った事実を明らかにした。真田家文書の構成や、代官と藩庁との文書システムの検討においても重要な視点を提供したといえる。

第8章の福澤徹三「官僚制機構の末端としての村——藩地域研究とアーカイブズ研究との接点——」は、水内郡北高田村（現在の長野市高田）の書留帳を用いて、藩政における村役人の役割を論じた。近世史研究における中間層論とも関わるが、何より藩と村の間の記録管理システムの様相を検討することの必要性を提起する。前掲の種村論文との関わりも含め、藩組織と地域社会との記録管理システムの解明が重要な課題として提起されたと

いえる。

第三編「大名家伝来文書群と記録管理」は、奥向きの役職などに関わる記録管理の実際について分析を行うことを試みた。大名の家に関わる文書や関連の奥向きの役所の文書群は、いわゆる大名家に伝来することが広く見られる。⁽¹⁵⁾しかし、奥向きの役所などに関係する文書類の分析は、従来、ほとんど検討されることはなく、役所の構造やその機能、そして文書のあり方も不明であった。幸いにも真田家文書では関係の文書群が少なくない。今回、次の三つの成果を得ることができた。

第9章の大友一雄「幕府老中職文書群に関する基礎的研究——松代藩公用方役人と文書システム——」は、真田家文書群のうちに相当量確認できる幕府老中職関係の文書群の理解と位置付けについて検討する。これらの文書群が藩主真田幸貫の老中就任によることはもちろんとして、大量の文書がなぜ残されたのか、とくに江戸藩邸における公用方役人の役割・機能を江戸殿中との関わりのなかで位置付け、合わせて役人制の問題から幕藩官僚制研究の課題についても言及する。

第10章の降幡浩樹「松代藩御納戸役の職掌と記録管理」は、松代藩の奥向きの役割に関わり、日常的な諸物の購入、道具管理において見られる記録類の作成、管理について、松代藩御納戸役がまとめた「嘉永五年二月十五日差出沿革之次第書草稿」を用いて紹介する。本史料は、藩命により各役所から報告された起源・沿革などを記した上申書で、御納戸役に関する草稿とその後の加筆を加えたものであり、この作成の経緯などの分析が今後の課題となる。

第11章の福田千鶴「藩主生母の格式をめぐる意思決定の史料空間——九代藩主真田幸教生母心戒の事例を中心に——」は、大名の存在に直結する城・屋敷の空間的な構造が、基本的に「表」と「奥」に分かれ、役人制なども別個に配置される状況を踏まえ、従来ほとんど取り上げられることがなかった正室・側室などの「奥」関係記

録の発生・処理の空間のあり方を追究する。その結果、「奥」の問題に「表」の様々な役職が関わり、けっして「表」と切り離せないこと、また、「奥」の身分格式などのついでに意思決定も「表」での議論が重視されることを明らかにした。「奥」内の意思決定などの手続きとの関連が課題となるが、「奥」と記録に関する新たな成果といえる。なお、「奥」で発生した文書の発見が課題となる。

第四編「伝来と管理」は、真田家文書の伝来と、現存する藩主の印章について検討を行った。

第12章の山中さゆり「真田家印章の使用と伝来」は、現存する藩主の印章について紹介すると同時に利用した場面（文書）と利用の特徴を明らかにする。花押、印章、血判などの存在は、文書存在そのものにかかわるため、利用に関する情報の蓄積が必要となる。今回は藩主の印章のみとなったが、藩庁全体を視野に入れた印章論としての展開が期待される。

第13章の工藤航平「真田宝物館所蔵真田家文書の管理と容器の特質——目録編成に向けた現状調査報告——」

は、とくに明治以降の真田家文書の管理と伝来を倉庫の利用、保管容器、さらにそれらの管理に関わって作成された当時の目録を通じて分析し、現在の収納に至る過程を明らかにすると同時に、管理の実態が示すアーカイブズ学的意義、そしてそれを踏まえた今後の管理方法、目録記述などについても言及する。これらの主張が成立した背景には、真田宝物館が所蔵する文書群が江戸時代の管理状態をよく保存しており、その結果、文書のみではわからない極めて優良な情報を伝えてくれることと関連する。

江戸と松代、松代の倉庫（多数の倉庫が存在する）、容器などの段階を経て理解する方法は、今回の共同研究のなかで積極的に導入したものであり、本章はその調査成果を整理・発展させた。今後の管理・保存活動においても重要な研究といえる。

以上、本書ではアーカイブズ資源に関する基礎的研究を目指して、組織と機能に最大限の注意を払い記録管理

の実態解明に努めた。かかる成果をアーカイブズ活動にいかにつなげるか、また、こうした学術研究をアーカイブズ理論にどのように反映させていくかが、次の課題となる。さらに、ここでの成果が、真田家文書などを利用する研究者に受けとめられ、新たな成果が生み出されることを期待したい。

- (1) 『記録と史料』創刊号（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、一九九〇年）。
- (2) 安藤正人「記録史料学とアーキビスト」（『岩波講座日本通史』別巻三、一九九五年）。
- (3) 国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下巻（柏書房、二〇〇三年）の刊行を機に改変した。
- (4) 『幕藩政アーカイブズの総合的研究』の刊行に先行して、二〇〇八年に国文学研究資料館編『藩政アーカイブズの研究——近世における文書管理と保存——』（岩田書院）を刊行した。書評などを通じて、「文書管理史」の有用性を評価されると同時に、歴史学からは歴史的な位置付け、アーカイブズ学からはアーカイブズ学における位置付けについて、議論の深化が期待された。二〇一五年刊行の『幕藩政アーカイブズの総合的研究』は、これらの課題を踏まえた取り組みである（具体的には同書を参照願いたい）。なお、本書では、とくにアーカイブズ学およびアーカイブズ活動における位置付けについて、序章で説明することに意を用いた。少し付け加えるのであれば、アーカイブズ・カレッジなどの実践レベルではすでに明確な解答を出しており、各文書群が内包する記録管理のあり方や、アーカイブズ構造分析の必要性和その意義については、「アーカイブズ資源研究」のなかに位置づけ、さらにアーカイブズの整理・目録作成などの理論的整理において欠かせない分析としている。また、文書管理の歴史などの問題は、アーカイブズ学の総論でも取り上げるべきテーマであり、アーカイブズ理論を鍛える上でも重要な研究である。
- (5) 具体的な研究対象については、大藤・安藤によって具体的な言及があるが、本文のように三つにまとめた。この三つの柱は、それぞれ担当する組織などが異なることを意識したものである。すなわち、一つ目の「記録管理」は記録を発生させた組織のもとの活動である。伝来研究は発生させた組織に関わることもあるが、時間が経過したものでは管理者・所蔵者の異動はむしろ当然であり、この変化を的確に捉えることがアーカイブズ管理上重要となることから、ひとつの柱としたものである。二つ目については本書では第13章工藤論文が伝来研究の意義について言及する。三つ目の

アーカイブズ構造分析は文書群の全体像を理解するための取り組みに関わるものであり、アーカイブズの保存・公開などを担当する場合に重要となる。この三つの柱については拙稿「アーカイブズを理解する」(前掲註3『アーカイブズの科学』下巻所収)を参照願いたい。

- (6) 具体的な取り組みの契機としては、たとえば、文書群を発生させた主体(組織・集団・個人)やその活動が不明または曖昧である場合、文書そのものの現存理由が曖昧である場合、文書相互の関係が理解しにくい場合などは、自覚的な検討が必要であり、それを欠くと目録記述が困難になりかねない。

- (7) 安藤正人『記録史料と現代——アーカイブズの科学をめざして——』(吉川弘文館、一九九八年)、アーカイブズ・インフォメーション研究会編訳『記録史料記述の国際標準』(北海道大学図書刊行会、二〇〇一年)、青山英幸『記録から記録史料へ——アーカイバル・コントロール論序説——』(岩田書院、二〇〇二年)など。

- (8) 国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』(思文閣出版、二〇一四年)。

- (9) 記録管理研究は、本書との関係で江戸時代に限っても多数の成果があるが、古文書学的様式研究、書札札研究、花押・印章研究、料紙研究など様々な研究がこれに関わるといえる。ただし、アーカイブズ学的には文書群を単位にその体系を理解しようとする視角が基本となる。たとえば、本書では成果を盛り込むことができなかったが、真田家文書の文書様式研究などは、全体理解に関わる問題であり、目録記述や文書群構造分析に反映できる大きな成果になることが期待される。また、これらの基本的研究と同時に、各組織における記録管理システムに関する研究が蓄積されてきている。歴史学的にまた国外との比較のなかで成果の蓄積が見られる。ここでは前近代の組織の構造や機能などに留意している点が特徴である。組織論・集団論を前提にそのなかでの記録認識や記録管理システムについての議論が深まっているとすることもできる。すでにアーカイブズ学を意識した資源研究は少なくないが、本書と関わる江戸時代の資源研究に注目しても、次のような成果がある。なお、すでに他の註で示した研究成果は、これを省略させていただいた。笠谷和比古『近世武家文書の研究』(法政大学出版局、一九九八年)、高木俊輔・渡辺浩一編『近世史料学研究——史料空間論への旅立ち——』(北海道大学図書刊行会、二〇〇〇年)、大友一雄『江戸幕府と情報管理』(臨川書店、二〇〇三年)、大石学編『近世公文書論——公文書システムの形成と発展——』(岩田書院、二〇〇八年)、国文学研究資料館編『中近世アーカイブズの多国間比較』(岩田書院、二〇〇九年)、渡辺浩一『日本近世都市の文書と記憶』(勉誠出版、二〇一

四年) など。

- (10) 真田家文書を利用した研究は、真田宝物館の研究紀要『松代』に様々な研究が発表され、蓄積が認められる。また、近年松代藩政や地域に関する研究が進展しており、まとまった研究成果には次のようなものがある。渡辺尚志編『藩地域の構造と変容——信濃国松代藩地域の研究——』(岩田書院、二〇〇五年)、渡辺尚志・小関悠一郎編『藩地域の政策主体と藩政——信濃国松代藩地域の研究Ⅱ——』(岩田書院、二〇〇八年)、荒武賢一朗・渡辺尚志編『近世後期大名家の領政機構——信濃国松代藩地域の研究Ⅲ——』(岩田書院、二〇一一年)、福澤徹三・渡辺尚志編『藩地域の農政と学問・金融——信濃国松代藩地域の研究Ⅳ——』(岩田書院、二〇一四年)。
- (11) 国立史料館編『真田家家中明細書』(史料館叢書第八卷、東京大学出版会、一九八六年)。
- (12) 国文学研究資料館史料館編『松代藩庁と記録』(史料叢書第二卷、名著出版、一九九八年)。
- (13) 前掲註(7)、および青山英幸「国際標準 (ISAD(G)2nd/ISAAR(CPF)2nd/ISDF) による組織構造体と機能構造体としてのフォンドの統一的把握——アーカイブズ・レコード・マネジメントにおけるアーカイバル・コントロール構築のために——」(国文学研究資料館編『アーカイブズ情報の共有化に向けて』岩田書院、二〇一〇年)、吉田千絵「レコード・マネジメントにおける国際標準の適用」(前掲書所収) など。
- (14) 実務レベルでは、目録記述の変更も視野に入るが、利用・管理上の問題から、性急な目録の変更は考えられない。しかし、該当する文書の利用者には情報提供が必要となろう。その際、本書が一定の役割を果たすことになる。
- (15) 笠谷和比古「大名家文書の史料的特質と目録編成」(国文学研究資料館史料館編『史料の整理と管理』岩波書店、一九八八年)。

あとがき

本書刊行に至るまでの経緯と成果を簡単に紹介する。本書の研究課題については大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館基幹研究「民間アーカイブズの保存活用システム構築に関する基礎研究」(研究代表者・大友一雄。二〇一三年度～二〇一五年度)の中で調査・研究されてきた内容に基づいており、科学研究費補助金(基盤研究(B))「藩政文書の記録管理システムに関する基盤的研究」(研究代表者・大友一雄。二〇一二年度～二〇一四年度)と共同で進めてきた。本書に関わる研究は合計七回に及ぶ研究会の中で議論され、研究の成果を地元である長野県長野市松代に還元するための報告会も開催した。以下、研究会と地元報告会は次のとおりである。

第一回研究会(二〇一二年六月二日)

- ・高橋実「真田家文書の概要と伝来」
- ・山中さゆり「真田宝物館所蔵資料について——研究の基礎として——」
- ・原田和彦「国文学研究資料館所蔵・田野口村小林家文書と真田家文書——善光寺地震復興との関係から——」

第二回研究会(二〇一二年十二月十六日)

- ・佐藤宏之「真田幸教の著作活動について」

- ・大友一雄「天保期における老中職公用方役人と情報管理——老中真田幸貫を事例に——」

第三回研究会(二〇一三年五月十一日・十二日)

・宮澤崇士「長野市立博物館の収蔵資料の概要」

・降幡浩樹「真田邸土蔵の収納形態」

・原田和彦「真田宝物館所蔵の文書と典籍について」

・工藤航平「真田宝物館所蔵真田家文書の史料目録改訂作業と史料群構造」

・北村厚介「国文学研究資料館におけるデータベースの取組み」

第四回研究会（二〇一三年九月二十八日・二十九日）

・浅倉有子「真田家の道具類管理について」

・太田尚宏「真田家文書〈家老日記〉の種類と性格」

・西村慎太郎「松代藩系会所の機能と記録の作成・授受・管理」

・種村威史「松代藩代官の文書管理とその特質」

第五回研究会（二〇一四年三月一日）

・青木睦「松代藩文書の管理・保存——信濃国松代真田家文書目録（その12・完）における編集過程での情報整備について——」

・福澤徹三「官僚制機構の末端としての村——藩地域研究とアーカイブズ——」

・福田千鶴「藩主生母の格式をめぐる意思決定の史料空間」

第六回研究会（二〇一四年七月五日）

・武子裕美「御側御納戸日記にみる文書の授受」

・山田哲好「松代藩における情報管理——「日記繰出」を事例に——」

・三宅正浩「祐筆間日記の史料性格」

第七回（二〇一四年十月四日）

・南隆哲「明治前期における「真田家文書」の文書管理とその伝来——「御蔵内日記書類下調」を素材として——」

・榎本博「御目付の職務と文書の生成・管理」

・宮澤崇士「松代藩職制を見直す」

地元報告会「松代藩真田家の歴史とアーカイブズ」（二〇一四年十二月十三日。主催・国文学研究資料館基幹研究「民間アーカイブズの保存活用システム構築に関する基礎研究」・科学研究費補助金（基盤研究（B））

「藩政文書の記録管理システムに関する基盤的研究」。後援・真田宝物館）

・丸島和洋「豊臣政権と真田昌幸・信繁（幸村）」

・太田尚宏「家老の仕事と記録類——日記とその周辺——」

・西村慎太郎「真田家の食卓と料理人」

・小宮山敏和「幕閣としての真田幸貫」

また、関連資料の調査は真田宝物館蔵真田家文書について合計二五日、長野市立博物館蔵代官野本家文書については合計七日、松代城下町の家老家文書・御用商人文書など民間アーカイブズについては合計三日、長野県立歴史館蔵松代真田家関係文書については一日実施した。特に、真田宝物館では、これまで作成されてきた目録のアイテムレベルでの精査、文書が収められていた収蔵容器および文書のまとまり（「単位」）や来歴の調査などを中心に行った。真田家文書の総合的な解明のためのアーカイブズ学に基づいた調査・研究であり、当然ながら日本近世史研究をはじめさまざまな利用の前提とも位置付けられる。

国文学研究資料館内での調査・研究の成果として、次の二点を挙げたい。

第一に、国文学研究資料館蔵松代伊勢町八田家文書の目録を四冊刊行し、一万四一四〇レコードを利用することができた（『史料目録』第96・97・99・101集、国文学研究資料館調査収集事業部、二〇一三年～二〇一五年）。八田家文書については本書第五章の西村慎太郎論文と第六章の渡辺浩一論文でも利用されている松代城下町の御用商人・町年寄を務めた家の文書群だが、すでに四冊（合計八九一六レコード）が刊行されており、合計で二万三〇五六点の利用が可能となった。

第二に、国文学研究資料館ホームページ内の『電子図書館』における「収蔵歴史アーカイブズデータベース」で公開を開始したことである。二〇一五年九月末日現在、真田家文書全点に該当する五万二一五九点、八田家文書八九一六点の検索が可能となった。このデータベースは国文学研究資料館蔵のうち二〇九文書群二七万五〇〇点余を横断検索する機能を備えており、利用頻度の高い真田家文書五六九レコード、八田家文書二八九レコードは画像公開を行っている。今後さらなる画像公開を計画している。なお、目録刊行・データベース作成に当たっては、国文学研究資料館の担当教員はもとより、事務補佐員の清水善仁・日裏祥子・上川准・武子裕美各氏、リサーチアシスタントの榎本博・北村厚介・大貫茂紀各氏をはじめとして、アルバイトの方がたの尽力の賜物であることを付言しておきたい。

本書は松代藩真田家を事例として藩の記録管理システムの解明を目指したものである。もちろんなお課題が多いが、記録管理システムを理解する上で一定の到達点を示すものとして刊行することができたと考えよう。本書刊行に当たっては思文閣出版の田中峰人・三浦泰保両氏には大変お世話になった。心より御礼を申し上げたい。なお、刊行に当たっては国文学研究資料館「研究成果刊行物購入に関する制度」の助成を得た。

二〇一六年一月

渡 辺 浩 一（わたなべ・こういち）

1959年生。東北大学大学院文学研究科博士後期課程中退，博士（文学）。人間文化研究機構国文学研究資料館／総合研究大学院大学文化科学研究科教授。

『日本近世都市の文書と記憶』（勉誠出版，2014年），共編著『契約と紛争の比較史料学』（吉川弘文館，2014年），共編著『自己語りと記憶の比較都市史』（勉誠出版，2015年）。

種 村 威 史（たねむら・たかし）

1970年生。國學院大学大学院博士課程後期単位取得退学，博士（歴史学），人間文化研究機構国文学研究資料館機関研究員。

「弘方御金奉行の財方における役割について」（調査収集事業部編『史料目録第90集 信濃国松代真田家文書（その11）』国文学研究資料館，2010年），「寛文印知以降の領知朱印改について」（『國史学』203号，2011年），「松代藩代官の職制と文書行政」（福澤徹三・渡辺尚志編『藩地域の農政と学問・金融』岩田書院，2014年）。

福 澤 徹 三（ふくざわ・てつぞう）

1972年生。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了，博士（社会学）。すみだ郷土文化資料館専門員，埼玉学園大学兼任講師。

『一九世紀の豪農・名望家と地域社会』（思文閣出版，2012年），『藩地域の農政と学問・金融——信濃国松代藩地域の研究Ⅳ——』（共編，岩田書院，2014年），「近世後期の江戸の花火と幕府政策」（『地方史研究』第375号，2015年）。

降 幡 浩 樹（ふりはた・ひろき）

1965年生。武蔵大学人文学部日本文化学科卒業。松代文化施設等管理事務所学芸員。

「寛永十九年の『算用書』について」（『長野市立博物館紀要』第6号，2002年），「村の記憶——堂の縁起と手習師匠——」（『市誌研究 ながの』第10号，長野市誌編さん室，2003年），「山のめぐみ——山中紙と松代藩御用紙——」（笹本正治編『山をめぐる信州史の研究』高志書院，2003年）。

福 田 千 鶴（ふくだ・ちづる）

1961年生。九州大学大学院文学研究科博士後期課程中途退学，博士（文学）。九州大学基幹教育院教授。『幕藩制の秩序と御家騒動』（校倉書房，1999年），『豊臣秀頼』（吉川弘文館，2014年）。

山中さゆり（やまなか・さゆり）

1972年生。中央大学文学部史学科卒業。松代文化施設等管理事務所専門員。

「真田宝物館所蔵恩田文書について——戦国期真田家家臣の一形態——」（『信濃』第50巻7号，1998年のち丸島和洋編『論集戦国大名と国衆14 真田氏一門と家臣』岩田書院，2014年所収），「真田家文書目録編成試論——研究の現状と展望——」（『松代』第21号，2007年）。

工 藤 航 平（くどう・こうへい）

1976年生。総合研究大学院大学文化科学研究科博士課程修了，博士（文学）。東京都公文書館史料編さん係専門員。

『史料目録第96集 信濃国埴科郡松代伊勢町八田家文書目録（その5）』（単編著，国文学研究資料館，2013年），『北海道伊達市大雄寺所蔵 亙理伊達家中諸家文書目録』（共編著，亙理伊達家文書調査研究会，2014年），「日本近世における地域意識と編纂文化」（『歴史評論』第790号，2016年）。

執筆者紹介（収録順）

大友 一雄（おおとも・かずお）

1955年生。学習院大学大学院人文科学研究科科学専攻博士後期課程退学，博士（歴史学）。人間文化研究機構国文学研究資料館教授・研究主幹。

『日本近世国家の権威と儀礼』（吉川弘文館，1999年），『江戸幕府と情報管理』（臨川書店，2003年），『アーカイブズの構造認識と編成記述』（共著，思文閣出版，2014年）。

原田 和彦（はらだ・かずひこ）

1963年生。國學院大学大学院文学研究科博士課程前期修了。長野市立博物館学芸員。

「松代藩における文書の管理と伝来」（国文学研究資料館アーカイブズ研究系編『藩政アーカイブズの研究』岩田書院，2008年），「松代藩における代官と百姓——善光寺地震後の村の復興をめぐる——」（福澤徹三・渡辺尚志編『藩地域の農政と学問・金融』岩田書院，2014年），「善光寺地震における松代藩の情報収集と文書管理」（国文学研究資料館編『幕藩政アーカイブズの総合的研究』思文閣出版，2015年）。

太田 尚宏（おおた・なおひろ）

1963年生。東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。国文学研究資料館准教授。

『幕府代官伊奈氏と江戸周辺地域』（岩田書院，2010年），「真田家文書〈家老日記〉の種類と性格」（『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第10号，2014年），「尾張藩徳川家における文書の伝来と管理」（国文学研究資料館編『幕藩政アーカイブズの総合的研究』思文閣出版，2015年）。

宮澤 崇士（みやざわ・たかし）

1982年生。東北大学大学院文学研究科博士課程前期修了。長野市立博物館専門員。

「松代藩「松原者」に関する一考察：「足軽」との比較の中で」（『信濃』64（9），2012年），「松代藩下級家臣団に関する一考察」（『長野市立博物館紀要（人文系）』第14号，2013年）。

岩淵 令治（いわぶち・れいじ）

1966年生。東京大学大学院人文社会科学研究科博士課程修了，博士（文学）。学習院女子大学国際文化交流学部教授。

『江戸武家地の研究』（塙書房，2004年），『史跡で読む日本の歴史』9（編著，吉川弘文館，2010年），「問屋仲間の機能・構造と文書作成・管理——江戸一番組雑問屋を事例に——」（『歴史評論』561，1997年）。

西村慎太郎（にしむら・しんたろう）

1974年生。学習院大学大学院人文科学研究科科学専攻博士後期課程満期取得退学，博士（史学）。人間文化研究機構国文学研究資料館准教授。

『近世朝廷社会と地下官人』（吉川弘文館，2008年），『宮中のシェフ、鶴をさばく』（吉川弘文館，2012年），「文書の保存を考える」（『歴史評論』第750号，2012年）。

きんせいだいみょう しげんけんきゅう
近世大名のアーカイブズ資源研究
——松代藩・真田家をめぐって——

2016(平成28)年3月15日発行

定価：本体7,000円(税別)

編 者 国文学研究資料館
発行者 田中 大
発行所 株式会社 思文閣出版
〒605-0089 京都市東山区元町355
電話 075-533-6860(代表)

装 幀 佐々木歩
印 刷 亜細亜印刷株式会社
製 本
